

# 新版教科書

## クロローズアップ

新しい教科書の魅力を、  
今号と次号に分けてご紹介します。  
今回は、「教材の力」をクロローズアップしました。

# 1 等身大の中学生を主人公に

## —作者からのメッセージ—

現代を生きる子どもたちと等身大の主人公の心情や、友達や大人との交流をテーマにした作品に出会わせたい。そんな願いを伝え、新たに書き下ろしてもらった文学作品が各学年に一作ずつあります。

ここには、子どもたちの本当の日常が描かれているので、共感をもって読むことができるでしょう。また、予定調和的な結末を迎えるのではなく、自分ならこの先どうするかと、子どもたちが自分自身に問いかけることができるような展開の作品となっています。

作者の方々に、作品に込めた思いや、中学生や先生方へのメッセージをうかがいました。



友達関係の微妙なすれ違いや、ほのかな恋愛感情をテーマにした「星の花が降るころに」  
安東みきえ（1年）

## 大丈夫、きっとなんとかやっつけていける

—魅力的なタイトルですが、どんな思いが込められているのでしょうか。

私の家に、二階まで届くくらい大きくて、きれいなドーム型をした金木犀の木があるんです。木の中に入るとプラネタリウムのように、外の世界から遮断されたような感じを受けます。安心感があります。でも、そんな心地のいいところに、いつまでもいられるわけではない。外の世界は必ず存在していて、いずれ出ていかなければなりません。星の形をした花が散り始めた木を、そういう象徴として考えてみました。

—この作品は、女の子どうしのすれ違いが大きなテーマになっています。

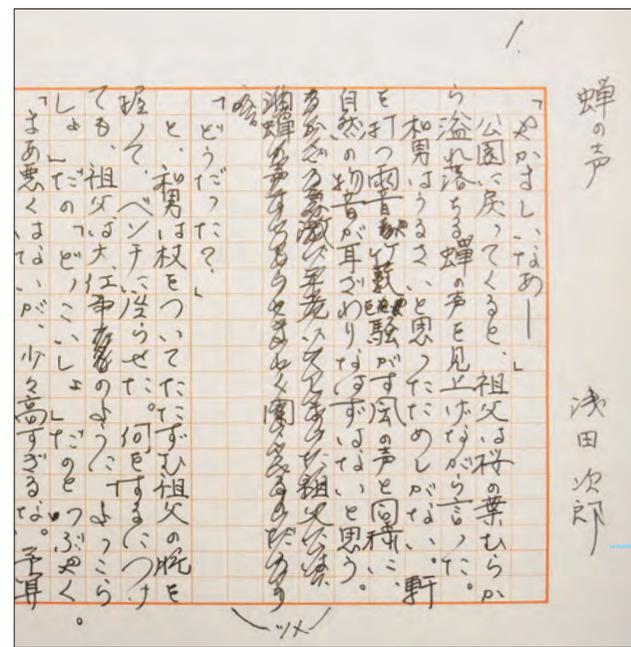
私も経験がありますが、中学生の頃は、友人関係で悩むことがよくあります。そんな

なにも思い通りにいくわけではないし、始終すれ違いがあったり、自分や相手がいじわるな気持ちになることだってあります。

後で思い返すと、たぶんささいなことで、あのときあんなに深刻に思い悩む必要はなかったんだ、と今なら思えますけどね。でも、この頃の子どもって、特に友人関係では、ほんとうに小さな悩みでも、すごく落ち込んでしまう。最悪のパターンだと、命を落とすこともあります。そういう報道を見聞きするたびに、大人として、なんとかしなければと切実に思っていました。

いっぱい嫌なことはあるけれど、それでいて頑張つてそれを「やり過ぎず」タフさをもつてほしい。そんな願いを、最後の、「大丈夫、きっとなんとかやっつけていける。」という言葉に込めました。

現実の社会では、けんかした子たちが、必ず仲直りして元どおりのいい関係に戻るといふことばかりではない



## 「星の花が降るころに」(二年) 安東みきえ

けれど、でも大丈夫。川が流れていくように、どんな嫌なことも押し流して、新しい水がどんどん流れてくる。そんなエールを送りたかったんです。

これを読んだときに、全員にすぐ伝わらなくてもいいんです。心の引き出しにしまっておいて、何かのときに思い出してくればいいなと思っています。

—男子のほのかな恋愛感情も織り込まれていますね。

そういう感情は、成長していく上で、とても大事なことだと思っています。また、この時期の女の子は、同級生の男の子がすぐ子どもっぽく見えて、先輩の男子に憧れるということがよくありますよね。でも、子どもにも見える同級生の男子でも、「なかなか、やるじゃん」と思える場面を描いて、男の子もがんばれと伝えたかった。

ただ、情景描写がロマンティック過ぎると、男の子が音読をするときに照れてしまうので、普通の小説を書くときと違って、甘くなり過ぎないような表現を心がけました。



居候の叔父に寄せる甥の複雑な心理と、広い世界へのいざないを描く「アイスプラネット」  
椎名 誠（2年）

蝉の声の降りしきる中、今まで秘めてきた戦争についての思いを祖父が孫に語り始める「蝉の声」  
浅田次郎（3年）

▲浅田次郎氏直筆原稿



児童文学作家。1953年、山梨県生まれ。  
97年版の国語教科書に「そこまでべたら」が掲載。2001年に「天のシーソー」で椋鳩十児童文学賞を受賞。  
主な著書に「頭のうちどころが悪かった熊の話」「夕暮れのマグノリア」「呼んでみただけ」など。

# 「不思議アタマ」のスズメ

「アイスプラネット」(二年)  
椎名 誠

—この作品は、子どもたちに元気を与えたという気持ちを込めて書かれたとうかがいました。

僕は子どもたちに、スケールの大きなことを考えたり、ゆったりしてほしいと思っています。現代社会は、ともすれば小さい枠にはめ込もうとする力が強く働いています。そこから外に出る力をもってもらいたい、というメッセージを込めました。

その力をつけるには、僕自身の体験でいうと、本を読むことから始めました。そこから夢や疑問が生まれ、そこに描かれている世界を知りたい、行きたい、という思いが生まれ、実行してきました。

「本からその先へ」。作品のモチーフも、そういうところにあります。



小説家・映画監督。1944年、東京都生まれ。  
89年『犬の系譜』で吉川英治文学新人賞、90年『アドバード』で日本SF大賞を受賞。  
主な著書に『わしらは怪しい探検隊』『岳物語』『白い手』『大きな約束』など。

# 僕といっしょに、戦争を考えてみないか

「蟬の声」(三年)  
浅田次郎

—「蟬の声」に込めた浅田さんの思いをおうかがいします。

戦後六十余年が経ち、今の中学生にとっては、第二次世界大戦は、僕らにとつては、日露戦争よりもっとかけ離れた感覚でしょう。僕も戦争未体験者ですが、僕が考えている戦争観と、中学生が考えている戦争観とは全くイメージが違うはずです。だから、「僕はこう考える」というのを中学生に提示して、「僕といっしょに考えてみないか」という思いを込めて書きました。

そして、もし中学生が戦争について興味を覚えたなら、もっと自分でいろいろと調べてほしい。自ら進んで得た知識こそが本物になりますからね。

僕は、自分の書いたものによって、百人

これは、古い考え方もかもしれないけれども、今こそ、そんな「その先へ」が求められているんじゃないかと思います。例えば、インターネット上で、モンサンミシエルの散歩道をたどることが出来ます。もうそれだけで行った気になってしまふ。未知の地にバーチャルで行けるといのはすごいことなんだろうけれど、僕はむしろ感じます。最初に知るきっかけはそれでもいいけれど、本当にきれいだと思ひ、行きたい気持ちをもったら、いつかは必ず、それを実現してほしいんです。

メッセージが大いにあるんです。定職を持ちなさいって、いつも僕の母に怒られていました。中学生は僕自身。あちこちで材料を探してきて、一緒に僕の部屋を造ってくれたこともありましたよ。僕はこの叔父さんからとても影響を受けたんです。

—そういう願いが、居候の叔父さんと甥との交流の中で描かれています。

ときどきアルバイトをしながら、世界を旅して写真を撮っている叔父さんが登場しますが、これはもちろん僕自身の投影でもあります。しかし、この叔父さんにはモデルがあつて、僕が子どもの頃に、我が家に居候していた叔父さんのイ

—叔父さんが、主人公に「不思議アタマ」をもつてほしいと呼びかけますね。

「不思議アタマ」というのは、行間とか話の続きとか、そこに書かれていないことや、いろいろなものを知りたがる頭脳のこと。さらに、自分の力でそれを考え、答えを探すことができる頭脳です。積極的にいろんなものを読んだり、聞いたりしながら刺激を受け、常に「どうしてなんだろう」と考えている頭。現代を生きる子どもたちには、ぜひ「不思議アタマ」を鍛えてほしいという僕の願いなんです。

に一人、千人に一人でもいい、きちんと自分の人生を見つめ、方向を考えてくれる子どもがいてくれれば、それでいいかなと思う。戦争、祖父と孫、そういったテーマを通して、自分たちの血脈を真摯に見つめてもらうこと。この作品が、そういう一助になればと願っています。

きたつもりです。だから、頭の中にはいろんな作品のフレーズが詰まっているんです。人物造形をするときには、それを頭の中で思い起こしながら、「僕ならこうする」などと想像力を働かせながら作っていきます。いちばん大切なのは想像力。想像したものを表現するのが文学。想像力は読書によって涵養されます。十人の読者がいれば、十人の想像がある。本を読む値打ちはそれです。小説家に限らず、どんな分野でも、いちばんものをいうのは想像力なんです。

—浅田さんの作品は、どれも登場人物の姿や言動がくつきり浮かび上がっていますね。

それは実経験から出てきたものではなく、読書によるものなんです。僕は、人より何倍も何十倍も本を読んで

だから、中学生には、うんと背伸びをして、格好つけて、文学書を読んでほしいと思います。多少難しくても気にすることは少ない。小説なんていうのはパーフェクトに読む必要はないんです。なんだかわからないなと思ひながら、読み飛ばしていても構わないんです。

特に古い小説をお薦めします。今は文学に限らず、いろいろな自己表現の方法があるから、言葉の力も衰微している。そうではなかった時代の、力のある文章にぜひふれてほしいですね。



小説家。1951年、東京都生まれ。  
95年『地下鉄に乗って』で吉川英治文学新人賞、97年『鉄道員』で直木賞を受賞。  
主な著書に『蒼穹の昴』『壬生義士伝』『露町物語』『中原の虹』『終わらざる夏』など。

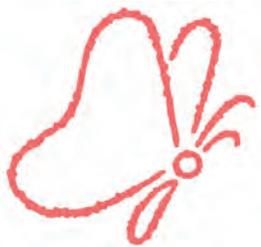
## 言葉に出会うために

これまで、  
どんな言葉に出会ってきたらう。  
そしてこれから、  
どんな言葉に出会うだろう。  
小学校で学んだことを確認し、  
中学校の国語学習の準備をしよう。

教科書を開けば、たくさんの言葉が  
あなたを待っている。  
一語一語に出会う喜びを実感しよう。

気になる言葉に出会ったら、  
立ち止まり、考えてみよう。  
言葉はいろいろな表情を見せるはずだ。  
何度も使うことで  
かがやきを増す言葉もあるだろう。

友達を増やすように、  
自分の言葉を増やしていこう。  
言葉の数だけ、世界は豊かに見えてくる。  
言葉の数だけ、未来は希望に満ちてくる。  
言葉の数だけ、自分の可能性が開かれる。



## 言葉との出会いを八つの観点で

一年の第一単元に入る前に、国語の世界をコンパクトにまとめた「言葉に出会うために」を置きました。小学校での国語学習を再確認しながら、中学校へのスムーズな接続を図るとともに、国語学習の基本である言葉に対する意識を高めることを目的としています。

たくさんの言葉と出会い、自分の言葉を豊かにし、言葉に対する感性を磨くことは、子どもたちに新しい世界を開き、新鮮な感動を与えるはずで。折にふれてこの出発点に戻り、言葉との出会いを見つめ直してほしいという願いを込めています。

「言葉に出会うために」では、言葉を自分のものとしていくために必要な技能を八つの観点に分けて、それぞれの具体的な学習の仕方をていねいに解説しました。  
すべての国語力のスタート地点ともいえるページです。

## 声を届ける

詩「野原はうたう」を声に出して読みながら、発声などのポイントを学び、「伝わる言葉」について考えます。

## 書き留める

ノートの取り方、活用方法を学びながら、たくさんの「言葉の記録」をしていきます。

## 本と出会う

本の見つけ方、図書館の活用法、読書記録の付け方を示し、さらに広い世界での「言葉との出会い」をつながします。

## 調べる

辞書・事典やインターネットを使って情報を集め、収集しながら「言葉の意味」を探求していきます。

## 言葉を読む

第一単元からはじまる作品を読み進めながら、「言葉の世界」を広げていきます。

## 言葉を知る

文法や、語彙の力など「言葉そのもの」を見つめます。

## 言葉を楽しむ

身近な自然や生活の中息づく「言葉の存在」に気づき、美しさを楽しみます。

## いにしへの言葉に出会う

さまざまな古典に出会い、「伝えられてきた言葉」にふれながら、古人の思いや考え方を訪ねます。

## 文学・説明文教材

これまでも評価の高かった教材に加え、新しいものの見方、考え方と出会うことのできる教材が充実しました。  
多様な筆者による個性豊かな教材は、生徒の感性を磨き、知的好奇心を旺盛にします。また、魅力的な文章だからこそ、そこで教えることもくつきりと浮かび上がっています。

### 磨き抜かれた言葉と幅広いテーマ——文学

教科書クローズアップ①で紹介した書き下ろし作品のほかにも、各学年に新しい教材を位置づけました。これまで長く親しまれてきた教材とともに、幅広いテーマで生徒の心に訴えかけます。



#### 「雪とパイナップル」

鎌田 實（1年）

「わたしは、うれしかった。人間ってすごいなあって、そのとき思ったのです。優しい心は、人から人へ伝染していくんだって。」

ロシアのベラルーシで医療活動にあたった日本の若い看護師と、患者の少年や家族との温かい交流を描く。



#### 「旅する絵かき—パリからの手紙」

伊勢英子（2年）

「僕は圧倒されて立ち尽くした。何十年前の少年が見た風景が、そのままここにあるんだよ。」  
八十歳の造本職人との出会いを、美しいパリの光景の中に描く。

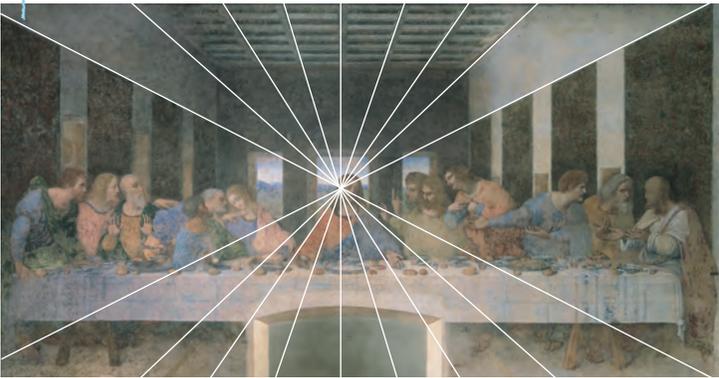
### 知る喜び・わかる感動——説明文

現代を代表する研究者の情熱にあふれる文章が、「知る喜び」をかきたてます。また、説明・解説型、仮説検証型など、さまざまな論理展開の文章構成は、「わかる感動」を呼び起こし、論理的な思考力や表現力を養います。

#### 「君は『最後の晩餐』を知っているか」

布施英利（2年）

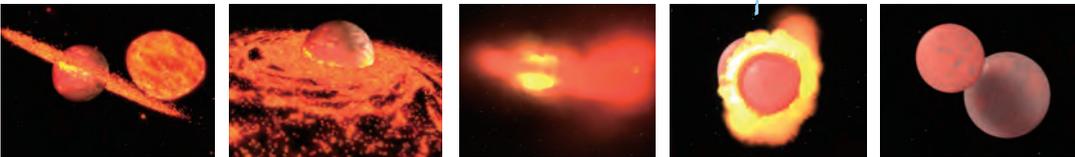
美術解剖学者が、名画「最後の晩餐」に施された緻密な計算を読み解く。



#### 「月の起源を探る」

小久保英一郎（3年）

月がどのようにしてできたのか、さまざまな仮説を検証しながら謎を解明していく。



⑤ 岩石の粒子が、互いに衝突、合体することで月ができる。 ④ 地球の周りに冷えて粒子となった岩石成分が円盤状に広がる。 ③ 地球の周りに岩石成分がまき散らされる。 ② 衝突の瞬間。 ① 地球に原始惑星が衝突する。  
シミュレーションをもとにした月の起源の映像

### 文学

■ は新教材

一年	野原はうたう【詩】	工藤直子
	にじの見える橋【物語】	杉みき子
	はじめての詩【詩・解説】	荒川洋治
	詩四篇【詩】	
	雪とパイナップル	鎌田 實
	【読書（物語）】	
	星の花が降るころに【物語】	安東みきえ
	大人になれなかった弟たち	米倉斉加年
	に……【物語】	
	少年の日の思い出【小説】	ヘルマン・ヘッセ
	木は旅が好き【詩】	茨木のり子
二年	明日【詩】	谷川俊太郎
	アイズブラネット【小説】	椎名 誠
	新しい短歌のために	馬場あき子
	【短歌・解説】	
	短歌十二首【短歌】	
	旅する絵かき—パリからの手紙【読書（物語）】	伊勢英子
	盆土産【小説】	三浦哲郎
	字のない葉書【随筆】	向田邦子
	走れメロス【小説】	太宰 治
	言葉の力【随筆】	大岡 信
三年	朝焼けの中で【詩】	森崎和江
	握手【小説】	井上ひさし
	俳句の可能性【俳句・解説】	宇多喜代子
	俳句十六句【俳句】	
	蟬の声【読書（小説）】	浅田次郎

### 説明文

■ は新教材

一年	ダイコンは大きな根？	稲垣栄洋
	【説明】	
	ちよっと立ち止まって	桑原茂夫
	【説明】	
	江戸からのメッセージ	杉浦日向子
	【読書（随筆）】	
	シカの「落ち穂拾い」	辻 大和
	—ファイルドノートの記録から	
	【記録】	
	流水とわたしたちの暮らし	青田昌秋
	【説明】	
二年	やさしい日本語【説明】	佐藤和之
	【読書（説明）】	
	五重の塔はなぜ倒れないか	上田 篤
	【読書（説明）】	
	君は「最後の晩餐」を知っているか【評論】	布施英利
	モアイは語る	安田喜憲
	—地球の未来【論説】	
三年	【批評】の言葉をためる	竹田青嗣
	【論説】	
	月の起源を探る【説明】	小久保英一郎
	光で見せる展示デザイン	木下史青
	【読書（随筆）】	
	【記憶】と「資料」【随筆】	沢木耕太郎
	ネット時代のコベルニクス	吉見俊哉
	—知識とは何か【論説】	
	アラスカとの出会い【随筆】	星野道夫
	聴くということ【説明】	鷲田清一

